

戸山香澄の誕生日を祝
いたい一般モブクラ
メイトの独白

魚澄蒼空

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

戸山香澄の誕生日を祝いたい一般男子のお話。

目次

戸山香澄の誕生日を祝いたい一般モブク	
ラスメイトの独白	1
戸山香澄の誕生日を祝いたい一般モブク	
ラスメイトの独白(2)	11

戸山香澄の誕生日を祝いたい一般モブクラスメイトの独白

戸山香澄は、クラスで一際目立つ女の子だ。

特徴的な髪型、突飛な言動、人気ガールズバンドのボーカル……例を挙げればキリはないけど、そんなことよりも彼女が目立つ要因は、誰とでも分け隔てなく元気に接してくれるその性格からだと思う。

「キミがお隣さん？ よろしくねっ！」

「……あ、うん。よろしくな」

事実俺が彼女と隣の席になった時は向こうから笑顔で話しかけてくれたし、俺の決して愛想のいいとは言えないような返事にも、色々な反応で返してくれた。

彼女は俺にとっての太陽のような存在だ。気障つたらしい言い方に聞こえるかもしれないけど、一度そうなのだと思うってしまったらこれはどうしようもないらしい。

隣の席。授業の合間の休み時間、授業中のふとした瞬間、そんな数分間の会話を通して、その積み重ねで俺は戸山香澄という少女を理解した気だった。太陽が立ち昇る光を一身に受け止めて、全て言葉の遣り取りで還元している錯覚を覚えていた。

光を浴びているのは俺だけではなく、また俺に光を当てている訳でもないと思ひ直したのは、彼女と隣の席になってからひと月ほど経ったある日。

——また、席替えが行われた時だった。

◇？

窓際の席は、眺めがいい代償だと言わんばかりに直射日光が容赦なく照りつけ机を温めていく。置いた国語の教科書は、余白の部分が真っ白く陽光に照り返して、結果誕生した眩い白日が視線を窓の外へと逸らさせた。

青い空に隆起する入道雲が、温い風に運ばれて緩やかに形を変えている。春と比べて色を濃くした青葉の生む木陰は、冷涼さの中に翳りを潜めてゆらゆらと揺れているのだった。

彼女とお隣だった時は、彼女が窓際の席だった。だから必然的に俺が唯一の隣人となる訳で、よって話すことが多かったのだと思う。

全くバカな話だ。ただ会話をしていただけで、あそこまで自惚れることが出来るなんて。普段女子と話さない俺のような人間に彼女がよくしてくれたのは、彼女がそれくらいいいヤツだからなんだってことは身をもって知っていた筈なのに。

彼女は次の隣人とも仲良く優しく接していた。

勝手に舞い上がって、そのまま放物線を描いて落ちた。呑気に浮かぶ雲のようにも、けたたましいながらも手前の思うまま叫ぶセミのようにもなれない。何処にでもいる半端者だ。ふと、彼女が窓際の席だった時に窓の外を眺める姿を思い出した。

元気で明るいいつもの顔とは違った、少し大人びた横顔。きつと眩しさに目を細めている俺とは違う景色が見えていたのだろう。

机の上にも、窓の外にも戻れない視線が窮屈に彷徨って、ため息が漏れる。

「……アホか」

「お前がな！」

「へ？——いでっ!？」

ポツリと漏れ出た独り言に野太い返事が返ってきたと思つた瞬間、教科書の角が頭に飛んできた。

「なーに授業中にセンチメンタリズムに浸ってんだ。お前期末の点数も赤ギリギリだったろ？ え？」

下手人——もとい最早担当科目を体育に変えた方がいいと皆が思うまでの筋肉ダルマが俺を見下ろしてニツコリと笑う。

「あー、すみません。ちよつとポーツとしてました」

「見りゃわかる。……お前、今週日曜の補習出席な」

「はあ!? あれは赤点のヤツだけって——」

「つべこべ言わないで来い」

「ええ……」

理不尽な出頭命令に項垂れる。笑うクラスの連中を睨めつけながら、日曜日が何日だったか頭の中で考えて——

（あ。今週の日曜ってそういや……）

——ふと、彼女の方を見た。

彼女も笑っていて、それだけでまあいいかと思えるくらいには俺は単純で。

そして補習の日は、中々に特別な日だった。

◇?

朝早くから集合させられて、少し立て付けの悪いドアがガタガタと鳴りながら開く。教室には誰もいなかった。

「……俺一人、か」

いつも騒がしい教室は何物も音のない箱で、外から聞こえるクマゼミの声がシャオ

シヤオと静謐に響いた。

それは筆箱とルーズリーフと教科書と電子辞書とだけが入った、いつもよりもダボついたりユックサックの中にも響いているような気がして、もう一つだけ入れていた俺のエゴと愚かな期待の塊に、ぐわんぐわんと反響していた。

いつもの席に着く。まだ朝が早いから、日差しは差し込んでこない。照らされることだつてない。

荷物を置いて、黒板に『このプリントを終わらせたら帰ってよし』と矢印で示されている紙の束を教卓から取って、右端の日付を書く欄に、チラリと目を向けた。

今日は7月14日。彼女の誕生日だ。

それは隣の席だった頃聞いた話だった。その時に「覚えてたら何かあげるよ」なんて適当な俺の軽口に、彼女は「ほんと!?! ありがとう!」と目を輝かせて身を乗り出して来たのを覚えている。

軽口のもりだった。でもその数字は以来ずっと俺の脳内を古典単語の代わりに占領していたし、何を買ったら喜ぶだろうなんて思考は文への読解力の代わりにとても精密に働いていた。

本当にバカらしい。

きつと彼女は似たような話を俺以外の皆とも沢山していて、覚えているか、なんても

のはあちら側の方が余程怪しい話だった。

仮に渡したところで——いや、これ以上考えても無駄だろう。事実として此処に彼女はいい。

だったら早めに終わらせよう。そして家に帰ったら、この塊はどうしようか。溶けて消えてしまえばいいと思った。

隣の席だった知人Bには、そのくらいが丁度いい——

「すみません、遅れましたっ!! ……つてあれ、キミだけ?」

「……戸山」

——ドアが開いた。

息を荒らげて、少し額に汗を浮かべた彼女が俺を見る。久々に話した所為か、声が変わりに上擦った。

「先生もいないの?」

「ああ。そのプリント終わらせたら帰っていいって」

「そうなんだー。じゃあ簡単だね!」

「だといいいけどなー。赤点の戸山さん?」

「むっ。でもキミも補習なんだからそんなに変わらないんじゃない? ……」

「俺は32点だから赤じゃないの」

「う、3点負けた……」

でも不思議と以前と同じような会話が出来ることに少し安堵した。きつと彼女の親しみやすさがあつてこそなのだと弁えてはいるから、もう変な錯覚は起こさないけど。

教卓からプリントを取った彼女が、何故か隣の席に座る。

「席、違くね?」

「でも皆来ないし今日なら大丈夫かなつて思つて。久しぶりだね、隣の席!」

えへへと無邪気に笑う彼女が眩しい。喉元まで出かかる言葉は、どうしてもそこでつかえてしまう。

「あー、確かに久しぶりかもな」

「前に隣だったの5月だったから、2ヶ月くらいだよ」

「そんなもんか」

「うん! 元気だった?」

「いや、それは隣じゃなくても分かるだろ……」

「それもそつか」

何が嬉しいのか、彼女はニコニコと笑っている。

それからは合間に雑談を交えながら適当に課題を進めていった。この前やったライブの話、バンドメンバーの話。

でもそんな雑談は出来ても、俺の口から誕生日の話題を出すことだけは何故かどうしでも出来ない。

やっぱりその笑顔は、彼女が誰にでも分け隔てなく向ける光だった。けれども彼女の口からバンドメンバーの名前が飛び出る瞬間だけは、その笑顔は全く違っていたから。気取られないように、スつとプリントに目を落とす。盆に乗せたグラス一杯の水を慎重に運ぶウエイターのように、抜き足差し足で目線をずらす。

『——丸善の棚へ黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けて来た奇怪な悪漢が私で、もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発をするのだったらどんなにおもしろいだろう』

そんな文章が目に入って、ああ成程確かに、と妙に感心してしまった。

がらんどくに中身が空を切るちっぽけな四角い箱をリュックの中から取り出して、此処に置いていきたいと思った。そしてそれが教室を中心に、学校ごと大爆発してしまえば、きつと何とも愉快で楽で孤独に違いないとも思った。

「うー……この文章読みにくくて面白くない……」

「いや、俺は結構好きだけど」

「そうなの？ 何か意外だね」

目をまん丸にしてこつちを見ているであろう彼女の顔を脳裏に浮かべながら、古い機

械で印刷され掠れた文字列をじっと眺めて呷く。

「——うん。俺も初めて知ったよ」

本当は、ずっと前から知っていた癖に。

◇？

「んー、疲れたあ……！」

「おつかれ」

終わらせた課題を提出して、連れ立って校舎をでる。茹だる熱気に捻じ曲がった陽炎が揺らいで、アスファルトの焦げた臭いがした。

川沿いの道まで適当に喋りながら歩いていると、伸びをする彼女の携帯が鳴る。それを開いた彼女の表情が、また華やいだ。

皆に向ける眩しい笑顔ではない、ふわりと花が咲いたように可憐な笑み。もう俺はその意味を知っている。

「ポピパの皆と待ち合わせしてるから、私先に行くね！ 久しぶりに話せて楽しかったよー！」

「あ、戸山！」

「ん？ 何々？」

近くの自販機に駆け寄って、サイダーを買った。首を傾げる彼女に押し付けた。

「これ。誕生日おめでとう」

「いいの!? ありがとうー!」

ぱあつと喜ぶ彼女が受け取ってくれたのを見て、何だかふつと力が抜けたような心地がした。

「どういたしまして。……じゃ、また学校でな」

「うん、じゃあねっ!」

走り去っていく彼女の背中を眺めながら、炭酸だけど持ちながらあんなに動いて大丈夫なのかなんて適当な心配が胸から湧いて出て笑い飛ばした。

炭酸が抜けると、ただの甘い水になる。ベタついて、喉に貼りつくだけの砂糖水。きつと、そういう風にできているのだ。

柵越しに眼下を流れる川を見て、リュックの中から長方形の箱を取り出した。包装紙に包まれたそれを握り締めて、思い切り放り投げる。

放物線を描いて、そのまま小さな飛沫をあげて箱は沈んだ。

終ぞ大爆発は起こさないまま、泡あぶくを立てて、その何かは何ともちっほけな最期を迎えた。

戸山香澄の誕生日を祝いたい一般モブクラスメイトの独白(2)

タツタツタツと駆ける足の音が、自分でも妙に軽やかに聞こえる。

真夏日。太陽は容赦なく照りつけて、おでこには汗が滲んだ。スクールバッグの持ち手も体温ですっかり温くなって、あまりいい触り心地とは言えない。

クーラーが一分一秒毎に恋しくなるような、補習からの帰り道。でも今はそんなに苦じゃなかった。誕生日ってこともあるし、何より――

「えへへ、プツレゼント〜」

もう片方の手に握られた、缶サイダー。

ひんやりとした温度が心地好い。でもそれだけじゃなくて。確かに、今の季節にはすつごく飲みたいものだけど、流石にサイダーを買っただけじゃここまで喜んだりはないかな。

有咲だったら、「お前のテンションの振り幅なんてそんなもんだろ」とか言っつきそうだけだ。

とにかく。重要なのはサイダーってどこじゃなくて、これをくれたのが彼だということこ

と。

春。同じクラスの、隣の席になった。最初は普通に、友達になりたくて話しかけていた。こころんみたいに明るかったり、さーやみたいに柔らかい反応だったりはしなかったけど、ちゃんと私のことを見て話してくれていることはハッキリと分かった。

私が話している時、不意に見せる笑った顔がすっごく胸に残って。いつの間にか、バンドとは違うキラキラドキドキがそこにあったことをすんなりと受け止めている自分がいた。

それを何気なくポピパの皆に話した時のことは……恥ずかしいからあんまり思い出したくないけど……。

でもだからこそ、自覚できたんだと思う。

今日の補習で二人きりになって、久々にたくさん話せたことに感じたキラキラの理由も。

誕生日ってことを覚えてくれていて、私にプレゼントをくれたことに覚えたドキドキの在り処も。

私はきつと、キミが……。

「皆、お待たせ〜！」

ガチャリと蔵の扉を開ける。夏でも涼しい蔵の空気が、滲んでいた汗を冷やして気持ち良い。

「お、来たな。今日の主役」

「補習おつかれ、香澄」

飾り付けをしていたらしい有咲とさーやが振り向く。「期待しててね」なんて言われていたけど、まさかこんなに豪華にしてくれていたなんて。

「ケーキ持ってきたよ」

「あ、香澄ちゃん。いいタイミングだね」

大きい白い箱を持つて入ってきたおたえとりみりん。なんだか去年よりもっと凄いい感じがして、テンションがすごく上がってしまう。

「わく、これ皆でやってくれたの!？」

「うん。『せっかくだから去年よりも派手にしたいな』って有咲が……」

「ちよ、おたえ！ 何言ってる……っておいバカ、くっ付く香澄!」

「有咲、ありがとう!!」

「ふふ、この流れは何年経っても変わらなさそうだね」

「いいんじゃない？ 変わらなくて。見てて面白いし」

「沙綾あー!!」

有咲に抱きついた私の傍らで、皆が笑い合っている。こんな何気ない瞬間で、ポピパで居られることの楽しさを感じることが出来て。

「皆も！ ぎゅ〜っ！」

嬉しきで、ついつい皆も抱き寄せてしまう。苦しいとか狭いとかって騒ぐ皆だけど、その表情は言葉と裏腹で、また嬉しくなった。

「香澄、普段より機嫌良いね」

不意に、おたえがそんなことを言う。

「え？ そりゃそうだよ！ だって皆がお祝いしてくれるんだもん！」

「確かにそうだけど。それだけじゃないって言うか……」

「？」

さーやまで首を傾げながらそう訝しんだ。

何か感じていることは、有咲とりみりんも同じだったみたいで……。

「つてか香澄、いつまでそのサイダー持ってたんだよ？」

「……あつ」

指摘されて、改めて気が付いた。

すっかり汗をかいて、温くなってしまうている缶。意識して握っていた訳じゃない。

本当に無意識に、離していなかった。

「なんで飲んでないの？ もう温くなってそうだけど」

「え、え〜つと。奢ってもらったのだから……勿体なくて？」

歯切れ悪く答えてしまったけど、それは半分ホントで、半分嘘。

多分きつと、キミがくれたものをずつと持っていたかっただけ。今行き着いた答えだけど、わざわざ言ったりなんかはしない。恥ずかしいし……。

それに……。

「あ、そういえば。今日の補習って確か……」

でも私の考えは皆にはお見通しだったみたいで。

一気にこっちを向く視線は生暖かいような感じで、なんとなくむず痒くなった。

「な、なんでそんなにこっち見るのお」

「いや、なんでもないけど。ちゃんと言えたの？」

「う……」

核心を突かれて、思わず言葉に詰まる。

みんな知っているんだ。私がどう思っているのかも、このサイダーを手放せない理由も。

それは、失くしたくないから。それだけで、今まで私はキミと皆と同じように接していた。同じクラスの、隣の席の友達。そこから変わらなきや、なくすこともないから。

でも……。

『戸山、誕生日おめでとう』

そう言ってくれたキミが、どうしても忘れられなくて。

私は――

「行つてきなよ、香澄」

「おたえ……」

そつと背中を押される。有咲も、りみりんも、さーやも。みんな優しく頷いてくれた。

「良い報告待ってるから、ね？」

そう言つてウイंकをするさーや。

「が、頑張つてね！ 香澄ちゃん」

力強く応援してくれるりみりん。

「……こつちはもうちよつと待つといてやるから、早めにな」

ぶつきらぼうに言う有咲。

みんなの気持ちが暖かくて。

「……うんっ」

私は、もう一度駆け出した。



柵に体重を預けて、暫くの間川を眺めていた。

沈んだソレはもう影も形もない。ただ乱反射してキラキラと、水面が眩しいだけだった。

「……何やってんだろ、俺」

独りごちて吐き出した息には返り事なんてある筈もなく、夏のじつとりとした空気を更に重くした。

いっそのこと爆発してしまえば——そんな勇氣はなかった。形にならないモノが燻つて、アスファルトに立つ陽炎みたいに揺れて、未だに何かを炙っている。

チリチリと。湿った薪を火にくべたような、どうしようもなくしようにもない燻りだった。

……暑い。

汗が吹き出す。柵を握る手が、ぎちりと音を立てた。錆び付いた鉄と、滲んだ手汗が絡まって立てた音。蝉の声や川の瀬なんかよりも余程響く音だった。

帰ろう。そう思い川から踵を返そうとしたところで。

「おーい!!」

「……戸山？」

彼女が向こうから走ってやってきた。

何か急用でもあったのか。バンドで過ごす楽しそうに言っていた彼女が戻ってくるなんて、余程の火急の用に違いない。

「どうかした？ 忘れ物とか？」

「はあつ、はあつ、……ううん、そうじゃなくてね……つ」

そう思っていたから、俺の前で立ち止まって息を整える彼女の意図が分からなかった。

ましてや、何処か揺らぎを感じるような視線で、それでも俺を真っ直ぐに見つめる理由なんて。

「そうじゃなくて……ってキミ、凄い汗！ 大丈夫!？」

何かを言おうとした矢先、彼女がはっと目を見開く。言われるまで気づかなかったが、小一時間も外に居れば、今の季節ならこうなるだろう。

「……え。ああ、ここにずっと居たからかな。別に——」

「ほら、これ飲んで！」

「いや、ちよ……うおっ!？」

「うわあっ!？」

大丈夫だという俺の言葉を聞き入れずに、彼女は持つていた缶サイダー——さつき俺があげたものだった——を飲ませようとプルタブを引いて、見事に爆発した。

「わ、わ、走つてきちゃったから……!」

シユワシユワと音を立てながら吹きこぼれていく炭酸飲料に、彼女は慌てふためく。そんな姿を見て、ふと隣の席だった頃が思い起こされた。他愛ないような話をして、笑い合つて、なんでもないような彼女の表情がどこまでも眩しくて。

思わず、こつちまで笑顔にさせられてしまうのだ。

「くっ、はは、何してんの」

「……っ。あー、笑わないでよー!」

「いやだつて、まだ飲んでなかったんだなつて。てかなんで持ち歩いてんの」

「え、その……それは……。あ、つて言うかごめん! 零しちゃつて」

多分、こういう所なんだと思う。

瞬間、何かどうでもよくなつた気がした。スツとした心地になつて、手前勝手に煮詰めた諸々を捨て置けるような、そんな気分だった。

「いいよ、そもそも戸山にあげたんだしそれ」

「でも……」

「あ、でもさ。結局飲んでない訳だし……今度時間ある時にでも、また何か奢るよ」

「！」

サイダーは流石にシヨボ過ぎたなど付け加えた。

「今は何か急いでるみたいだし、ポピパでも予定あるんだろ？ 俺のことはいいから――」

「……がいい」

「ん？」

やおら、彼女が小さく呟く。伸びた指が、俺のシャツの裾をちよこんと握った。

「それ、今がいい」

「え？ いや俺はいいけどそっちは……」

「キミだから。今、用あるの」

「え……」

そう言った彼女の目は、さっきと同じように俺を見ていた。

夏の陽射しが眩しい。その輝きを返す水の流れも。そんな空にも、眼下の川にも、今は視線を逸らさなかった。逸らしてはいけなと思った。

「分かった。……じゃ、どっか行くかあ。戸山はどこがいい？」

力を抜いて、彼女に笑いかける。

「どこがいいかな。駅前のカフェもいいし、つぐのとも。あ、でもあそこも――」

「そんな行けねえよ。金ない」

一先ずは彼女も力を抜いてくれたようで、ぱっと華やいだ表情は、やっぱりいつもの彼女だった。

何を話すつもりなのかは知らない。けれど今こうして隣り合って歩けていることが全部だ。

せめて誕生日くらいは祝っても、バチは当たらないだろう。

未だに裾を摘む彼女と話しながら、暑い街路を歩いていく。眩しい太陽が、梅雨明けの晴れた空に輝いていた。